

南島考古雑録（Ⅱ）

高宮廣衛

はじめに

本シリーズ（Ⅰ）では、①円筒形丸底深鉢形土器、②宇和川半洞穴採集土器の類例、③暫定編年の一部修正、の3項目を取上げた（「南島考古雑録（Ⅰ）」『南島考古』第11号、沖縄考古学会、1991）。今回は④上クルク原貝塚の表採資料、⑤八重山考古編年（私案）の一部修正、⑥福岡県における開元通宝の出土例——特に7～12世紀遺跡を中心にして、の3項目を取上げたい。

（4）上クルク原貝塚の表採資料

1. はじめに

上クルク原貝塚は1969年、喜舎場朝敬氏によって発見された縄文後・晩期の遺跡で、知念村字知念上クルク原1104番地に所在する（註1）。本貝塚の名称については「クルク原」の前に「上」が付いたり、付かなかったり表記上の不統一があるが、かつて本遺跡で試掘調査を実施された新田重清氏によると「上クルク原」が地名としては正しいということであり、本文では「上」を付けた名称を使用することにする。

本貝塚は沖縄本島南部に位置する知念村の太平洋に面する石灰岩丘陵上に形成され、新田氏が1970年に調査を行ったところ、採石工事が進行中で、遺物包含層は大分破壊され、断崖上部と崖下の2か所にわずかに残っていただけで、上下の遺物層が本来同一遺跡の包含層だったのか、それとも別々に堆積したもの

なのか確認できなかったという。調査当時、崖面上部の包含層は約30メートルの幅を有し、崖下の包含層は約15メートルの範囲に分布していたという。調査後、採石工事はさらに進行し、数年後に壊滅してしまったようである。

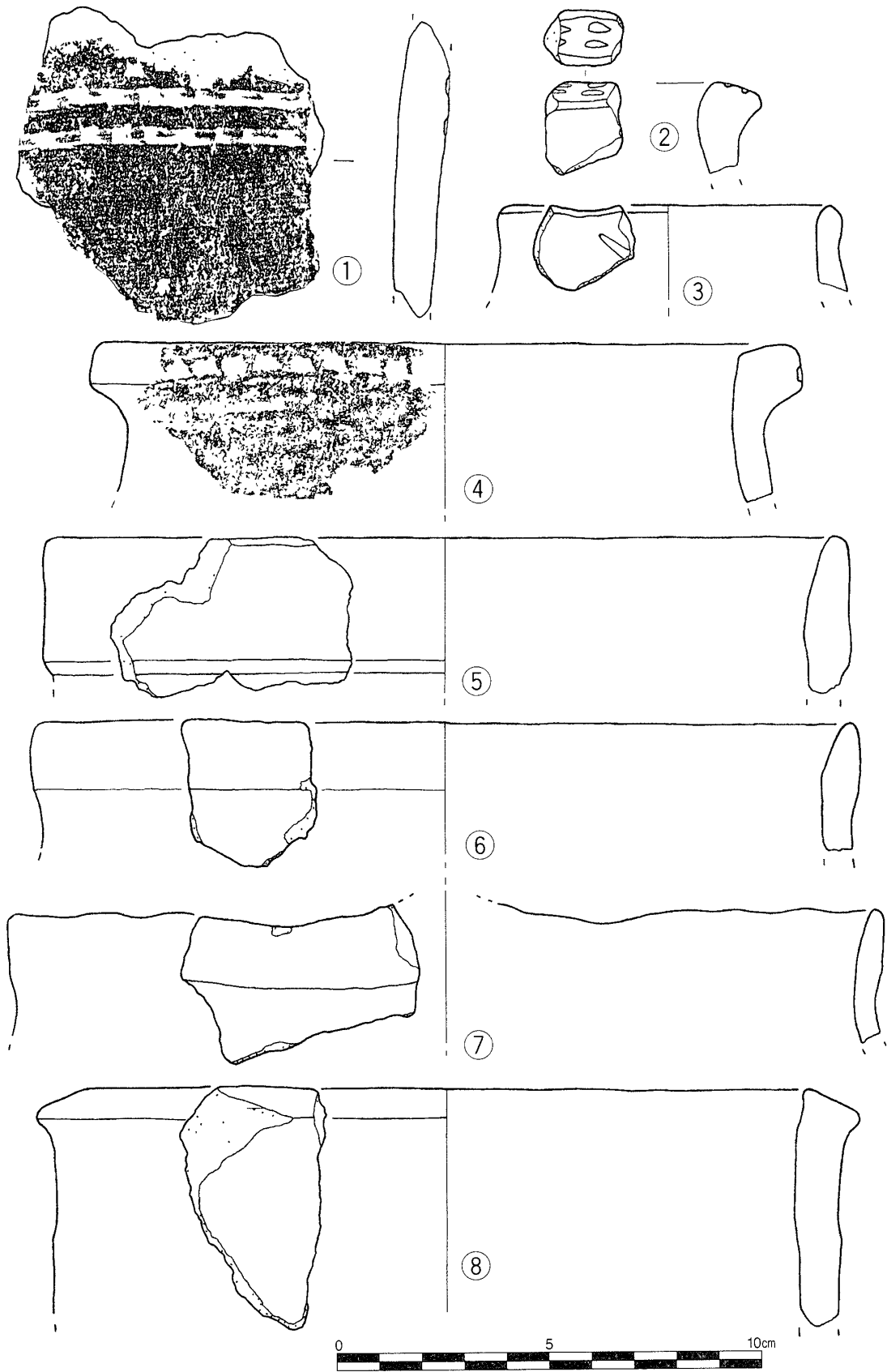
本学の考古学研究室では、毎年、2年次の新入ゼミ学生が遺跡見学を行い、表採できる場所では表採を行ってきた。上クルク原貝塚でも1974年以来、数回地表調査を行い、若干遺物を採集している。壊滅後の地表調査なので採集量は多くはないが、中には貝輪など貴重な資料も含まれており、ここに表採資料を簡単に紹介しておきたい。

2. 遺物

数年間のサーヴェイで表採された遺物は土器671片と貝輪の1点だけで、石器や骨器は得られていない。

A) 貝輪

第3図33に示す1点で、ゴホウラ製である。上下両端に緊縛用の袂りが設けられている。袂りは内外縁の両側に設けられ、上下の両袂りとも表面の内縁側から外縁へ向けて紐ずれ様の浅い溝がわずかながら認められる。下端に破損面が消えきらずにわずかに残っているものの、表裏面・内外両側縁とも丁寧に研磨され、光沢を有する。貝輪の破損品を再利用した可能性もあるが、今後の課題としたい。



第1図 上クルク原貝塚の土器

B) 土器

土器は破片が671点表採されているが、すべて小破片で、復元して完形を示せるようなものは含まれていない。土器は数タイプ採集されており、大別すると縄文後期に属するタイプと、晩期に見受けられるタイプが含まれている。

まず、前者から概観する。型式不明を含め数タイプ採集されている。

a) 型式未定の縄文後期土器

第1図1は頸胴部の破片で、上部に文様が逆T字状に残っている。まず、幅約4ミリの単篋工具で横位に押し引き文を2条施す。施文は左から右の方向である。この横位文の上部に同種工具による数条1組の縦位文様を施しているが、破損面に2列の下端部がわずかに残っているだけで、注意しないと見落とししてしまいそうな残存状態である。施文は下から上の方向である。いずれも施文は浅い。しかし、文様は明瞭である。残存部から類推される文様は伊波式や萩堂式に見受けられる三段文様である。器面は丁寧にナデられており、擦痕はみられない。焼成は良好で、多量の石灰質砂粒のほか少量の石英を混入する。厚さは1センチ前後、沖縄の土器では厚手の部類に属する。この土器は文様の構図からすると伊波式に近いが、器質の特徴が伊波式と異なっている。今のところ、類例が見当たらない。

b) 室川式土器

第1図2は室川式土器の口縁部で、口径は不明だが、やや胴部の張る器形とみられる。肥厚部の断面は類三角形だが方形に近く、口唇部は平坦に整形され、同部に2条1組の点

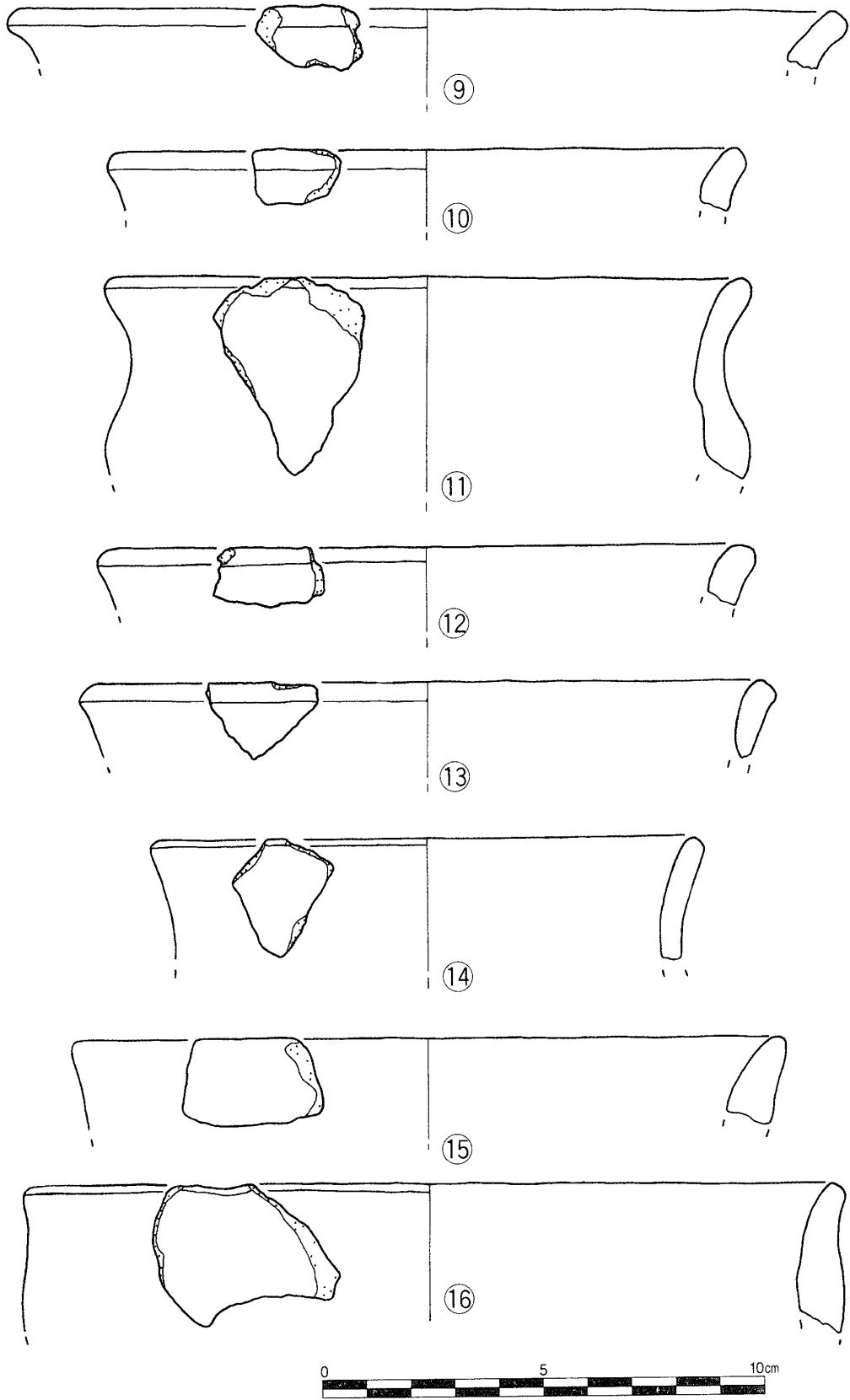
刻文を左から右方向に描いている。それ以外の部分に文様は認められない。器面はナデ調整を行っているが、器肌は上記標品ほどなめらかでなく、混入物の石灰質砂粒が器面に露出して幾分表面はザラツク感じである。胴部の厚さは約8センチ。器色は茶褐色、石灰質の碎片を多量混入する。焼成は良好。

第1図4も室川式の口縁部である。肥厚部の断面は方形を呈する。口径は推算17センチで、やや胴上部の張る器形とみられる。文様は口縁肥厚部外面に横捺刻文を1条施すのみで、それ以外の部分に文様は見受けられない。刻文は幅約3ミリの単篋工具を使用し、刻文を左から右方向に深く刻む。器面は両面ともナデ調整により滑面になっているが、裏面にはわずかながら横位の擦痕が消えきらずに残っている。器色は茶褐色で、胴部の厚さは8ミリ前後。胎土には多量の石灰質砂粒のほか石英類を少量混入し、器面でも容易に観察できる。焼成は極めて良く堅緻。

c) カヤウチバンタ式土器

口縁破片が3点得られているが、肥厚は微弱であり目立たない。

第1図5はカヤウチバンタ式土器で、肥厚部直下で破損している。口径は推算19.4センチ。多少直口気味に立ち上る。肥厚部下端の段はやや不明瞭。口唇部は丸みを帯びる。以上の特徴は典型的なカヤウチバンタ式から若干外れており、後述の諸特徴を加味すると、本標品は後出のタイプとみられる。器面は両面とも丁寧なナデ調整を行っており、擦痕は見受けられない。胴部の厚さは約8ミリ、器色は茶褐色を呈し、多量の石灰岩片を混入。混入礫は2～3ミリの比較的大きなもので、



第2図 上クルク原貝塚の土器

器面でも容易に観察できる。焼成は普通で、器肌は柔らかい感じである。

同図6もカヤウチパンタ式土器に含められるもので、肥厚部上下の幅は幾分小さく、下端の段もルーズで目立たない。口径は推算17.8センチ。口唇部は丸みを帯びる。器面は両面とも丁寧にナデられ、スムーズである。器色は茶褐色で、胴部の厚さは約6ミリ。胎土に多量の石灰質砂粒と少量の石英を混入し、器面でも観察できるが、目立つほどではない。焼成は良好である。この土器も終末期形態の一つであろう。

同図7は口径推算23センチ。山形口縁だが、頂部は破損。口唇部は丸みを帯びる。肥厚は微弱で、下端の段もなだらかに胴部へ移行する。胴上部が若干張るタイプとみられる。器色は黒褐色を呈し、胎土に石英の微砂粒を多量混入するが、器面では目立たない。器厚は7ミリ前後と比較的薄い。しかし、焼成はきわめて良く、堅緻である。以上に記したこの土器の器色・器厚・混入物・焼成等の諸特徴は本貝塚の他の土器と異なっており、移入土器の可能性もある。要注意の資料である。

d) 宇佐浜式類似土器

同図8は肥厚部断面が三角形を呈する深鉢形で、口径は推算16.6センチ。胴部の張りはきわめて弱く、垂直に近い。器面は表裏ともナデられ、擦痕は見受けられず、滑面を呈する。器色は暗褐色（内面は赤褐色）で、胎土にやや粗めの石灰質砂粒（1～2ミリ）を多量混入し、器面でも容易に観察できる。器厚は1センチ前後で多少厚い。焼成は良好で、固い。

この土器は口縁部の肥厚形態からすると宇

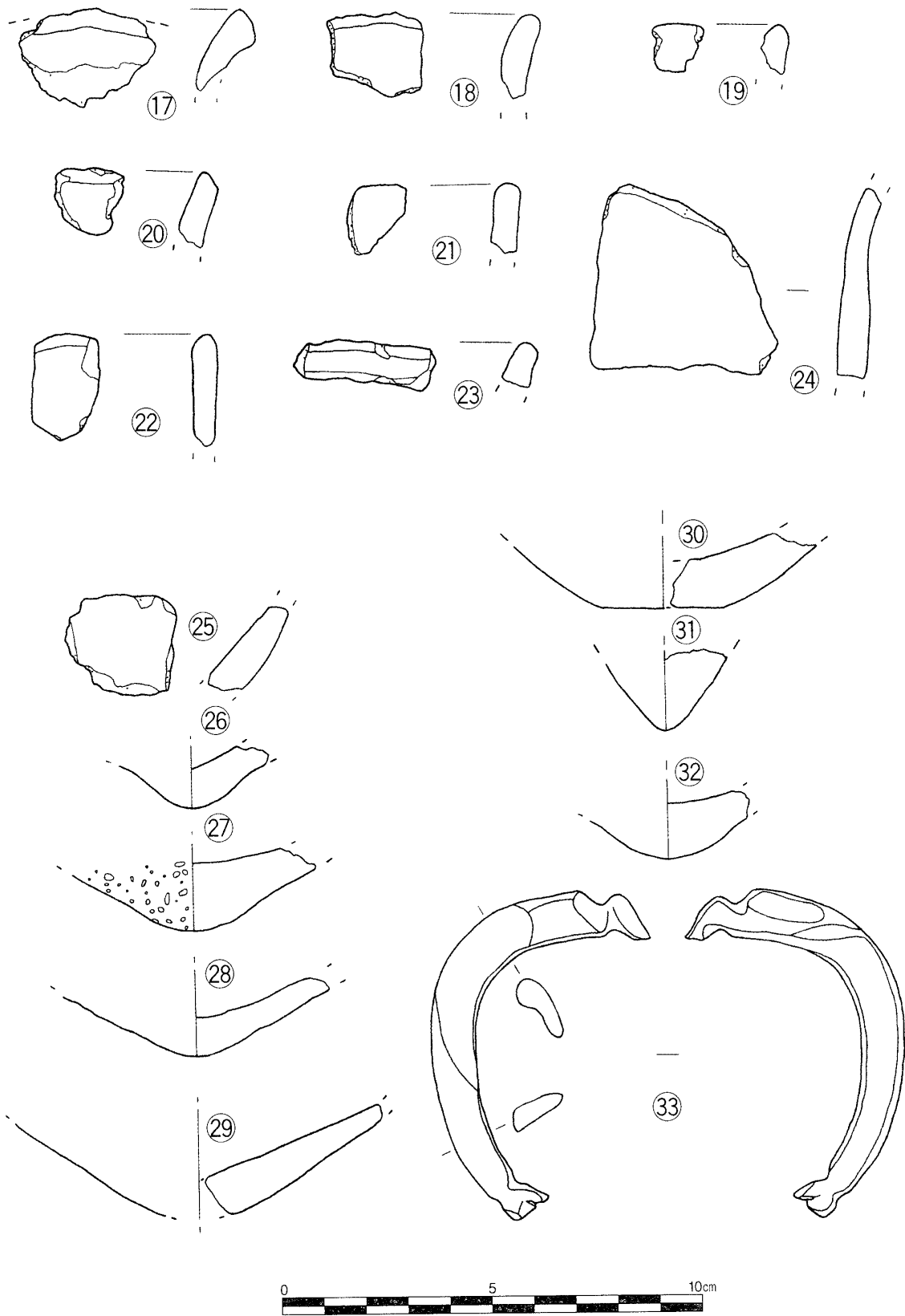
佐浜式に属するが、器種は深鉢形で、その点で宇佐浜式と異なっている。この種の土器は西長浜原遺跡に多く、宇佐浜式の祖型かと考えているが、詳細は西長浜原遺跡の報告書（現在、作成中）にゆずりたい。なお、これについて新型式を設定すべきか、現在検討中である。

e) 無文口縁

無文口縁は第2図および第3図17～23に示す16点である。口縁はすべて外反するが、概ね3タイプに分類することができる。1つはくの字状に頸部が屈折するタイプである。第2図1がそれで、下端に屈折部がわずかに残っている。これに類似のものが、同図10と第3図17である。これが第2のタイプで、口縁上部は大きく開くが、頸部がくの字状に屈折するのか、それとも湾曲するのか現資料からは分からない。第3図17の内面は湾曲しており、後者（湾曲）の可能性が高い。

以上の3点を除くと、口縁部がゆるやかに外反するタイプで、強いて分ければ強弱2様認められる。第2図11・12などはやや大きく外反し、同図13・14などは外反がゆるやかである。同図11は胴上部の張りが大きく、一見壺形にみえる。

口唇部は断面が舌状を呈するものが多く、第3図17・20はやや平坦に仕上げられている。器面は両面とも丁寧にナデられており、擦痕は見受けられない。器色は明るい茶褐色のものが多く、第2図15・16は暗褐色を呈している。胎土の混入物は石灰質砂粒が主体であるが、第2図15は石英のみ、同図16、第3図18・21・23の4点は石灰質砂粒のほか石英を少量混入する。焼成はよい。



第3図 上クルク原貝塚の土器と貝輪

第3図24は口縁部を欠く頸胴部の破片である。残存部からみると、ゆるやかに外反する器形である。表裏面とも丁寧にナデられ滑らかで、混入物は石英だが、器面では確かめ得ない。器色は茶褐色、焼成も良好である。

f) 壺形口縁

第1図3は壺形の口縁破片で、口径は推算8.2センチ。口縁は直立気味に立ち、肩は張るが、どのような張り方をするのか現資料からは不明。口唇部の断面は舌状を呈する。器色は茶褐色、器面は両面ともナデられ、胎土に石英の細片を多量混入する。焼成は普通。外面の斜沈線は文様ではなく、傷跡である。

g) 底部

以上に記述した土器と器色・器面調整の方法・混入物等の特徴を共有する底部が3点ある。第3図30～32の3点である。

同図30は平底で、底縁から胴部への移行は若干外側へ膨らむ器形に属し、縄文後期の荻堂式や大山式などにみられる器形と同種である。ただ、底径が、荻堂式や大山式などの平均6センチに比べると、3センチと小さく、室川上層式期の平底の底径に近い。器質も荻堂式や大山式などと異なっており、後出のものであろう。外面は丁寧にナデられているが、内面には若干擦痕が残る。石灰質砂粒のほか石英を少量混入。

同図31は尖底で、三角錐状に尖る特殊な器形で、類例は少ない。器面はナデ調整を行い、多量の石灰質砂粒を混入。焼成もよい。同図32はやや開き気味の尖底である。器面はナデ調整を行い、多量の石灰質砂粒のほか石英を少量混入する。焼成は普通。

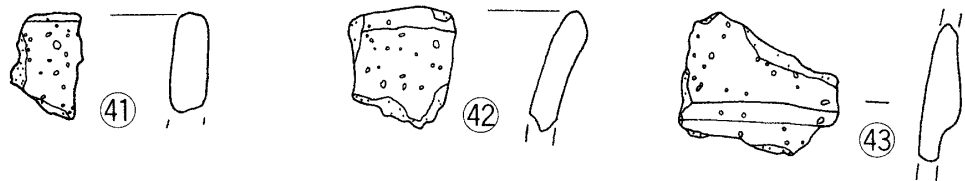
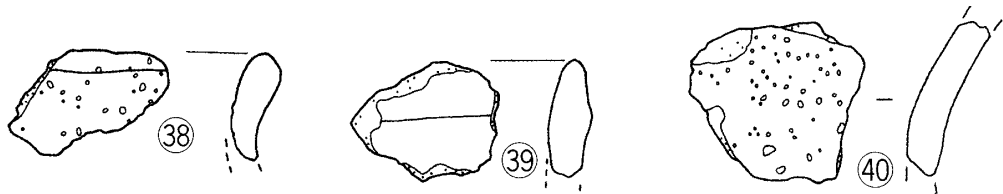
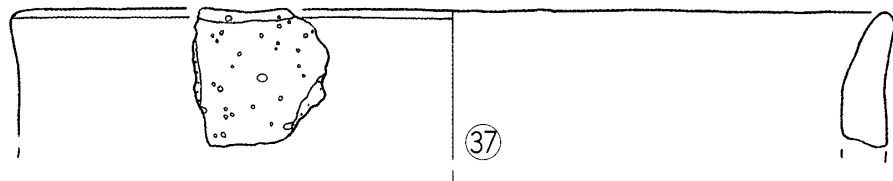
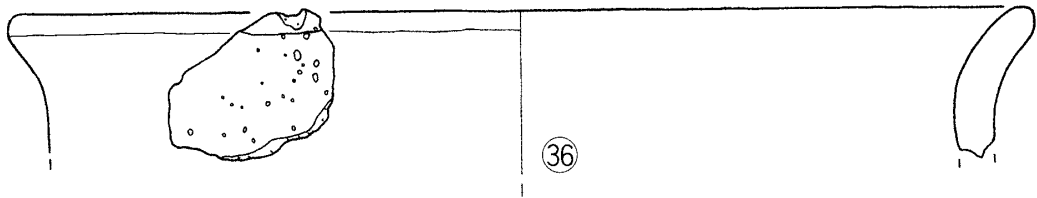
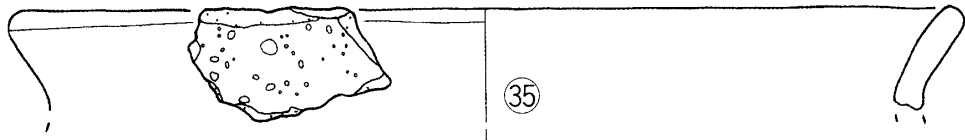
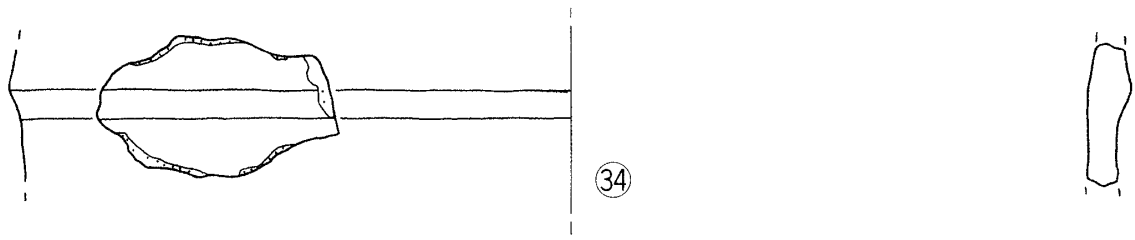
h) 胴部

ここに分類した胴部破片は第1表に示すように446点収集されている。器質はどちらかといえば泥胎に属するが器面は丁寧にナデられ、焼成は良く、比較的固く、その点で後述の器面ポーラスな室川上層式と異なっている。器色は淡い褐色ないしは明るい茶褐色を呈するものが一般的である。

第1表 上クルク原貝塚表採の土器

採集数	型式名	型式未定	室川式	カヤウチバンタ式	類宇佐浜式	無文口縁	壺形口縁	室川上層式(ポーラス)	合計
口縁部	1	2	3	1	15	1	10	33	
頸部	5						1	6	
底部	3						5	8	
胴部	446						178	624	
合計	477						194	671	

胎土の混入物は石英主体のものとは石灰質砂粒を含むものに2分される。前者は少なく10数片で、器色は暗褐色を呈し、焼成は幾分悪く荻堂式や大山式の器質に類するもので、後述の他の土器にくらべ、古い要素を保持している。これを除くと他は石灰質砂粒を混入するもので、圧倒的に多い。砂粒のサイズは1ミリ前後の小さなものから5ミリ前後の大きなものまでであるが、大体は1～3ミリである。また、石質もさまざまに貝殻や石灰岩の破片など数種類見受けられる。おそらく海岸の砂



第4図 上クルク原貝塚の土器

を利用したものであろう。

器面における擦痕の有無を調べたところ、第2表の「ナデ」の欄に記したように、器面をナデ調整するグループは内面のみに施す例がもっとも多く、次いで両面に施す例が多い。表面のみという例は極端に少ない。全く施さないものも31%強ある。

第2表 擦痕

擦痕 種類	無し	両面	表面	内面	合計
ナデ(%)	31.15	13.59	2.56	52.7	100
ポーラス(%)	43.26	15.73	2.8	38.21	100

器厚は第3表「ナデ」欄のとおりで、計測にあたっては破片の厚い部分を対象とした。器厚は一定しているものもあるが、このような土器は少なく、大部分はわずかに凸凹している。その厚い部分を対象にしたわけで、したがって、器厚が一定していない場合は、計

第3表 器厚 (ナデとポーラスグループの比較)

種類 厚さ(mm)	ナデ(%)	ポーラス(%)
3	0.22	0
4	3.52	3.39
5	8.67	14.13
6	18.97	30.51
7	33.49	28.82
8	24.13	13.00
9	8.9	8.48
10	1.88	1.13
11	0.22	0.54
合計	100	100

測値より薄い部分も存在することになる。結果は第3表のとおりで、6・7・8ミリに集中している。10・11ミリの厚さのものは尖底器形の底部に近い破片とみられる。

以上に記述した土器は文様・器質などからみて縄文後期末に比定できると考えるが、明るい茶褐色のものは、無文化が進行している点を考慮すると晩期初頭に下る可能性もある。

i) 室川上層式土器

口縁部・胴部・底部の破片が194点採集されている。この土器は器面がポーラスになっているところに特徴の一つがある。

口縁部は10点得られている。このうちカヤウチバンタの特徴を有するものが2点ある。第4図34は口径推算20.2センチ。口縁部上半を欠く。外面は丁寧にナデられているが、内面はポーラスになっている。片面ポーラスの例である。同図43も口縁上半を欠く。両面ポーラスになっているが、内面は外面に比べて弱い。

同図39は類宇佐浜式とでも称すべきもので、肥厚部はやや特異な形態に属し、カヤウチバンタ的というよりも、むしろ宇佐浜式に近い。しかし、宇佐浜式に比べると肥厚部の三角形が間延びしていて、典型的な宇佐浜式の形態から外れている。器種は深鉢形に属することから、第1図8と同じグループに含めておく。内面はポーラスになっている。

以上の3点を除くと、他は肥厚の認められない深鉢形の口縁破片である。口縁部は外反するが、大別すると「くの字」状に屈折するものと、ゆるやかに外反する2タイプに分けられる。前者は第4図35の1点で、器面は両

面ポーラスになっている。

残り6点のうち同図36・40の2点は大きく外反するタイプだが、他は小さく外反するタイプである。41は外面のみポーラス、他の5点は両面ポーラスになっている。

底部は5点得られている。すべて尖底である。第3図27は両面ポーラスだが、他の4点は内面だけポーラスで、外面は丁寧にナデられスムーズな器面になっている。尖底は同図にみられるように、すべて開き気味の器形である。

胴部は178点得られている。室川上層式の特徴の一つは、先述のように器面がポーラスになっていることである。したがって、両面ポーラスなものが一般的であるが、中には内面だけポーラスになったり、外面だけポーラスなものもある。しかし後者は稀である。このグループも石灰質砂粒を混入する。砂粒のサイズや種類は前項の「ナデ」グループと同じである。これに少量石英を混ぜるものもある。しかし、石英の混入量はきわめて少ない。器面がポーラスになっているのは混入の石灰岩が抜け落ちた可能性も考えられる。

器色は淡い褐色のものや黄褐色を呈するものが一般的である。焼成は悪く、泥胎で、吸水性は強く軟質である。

擦痕の有無を調べたところ、第2表「ポーラス」欄のとおりで、出現率はナデグループと同じく内面にのみ施す例が多い。しかし、両面にみられない例がもっとも多く、43%もある。その点で前項のナデグループと異なっている。なお、両面ポーラスなものと同様に片面ポーラスなものについて、擦痕の状況を調べたものが第4表である。

室川上層式の胴部の器厚は第3表の「ポー

ラス」の項に記載したとおりだが、「ナデ」グループと違って、5・6・7ミリに集中している。出現率をみると、7ミリの次に「ナデ」グループでは8ミリが多いが、「ポーラス」グループでは逆に6ミリが優勢である。

第4表 ポーラスグループの擦痕

擦痕種類	無し	両面	表面	内面	合計
片面ポーラス(%)	35.9	20.51	0	43.59	100
両面ポーラス(%)	45.72	14.29	3.56	36.43	100

以上の結果からみて、「ナデ」グループは若干厚手であるのに対し、「ポーラス」グループでは薄くなる傾向が認められる。

3. おわりに

以上、表採資料のあらましを紹介した。

土器からすると、本貝塚は縄文後期末ごろから晩期初頭に位置づけられる。採集資料の中で、最古とみられる土器は第1図1の有文土器である。破片上部に逆T字状に文様の一部が残っている。残存部文様から想定されるオリジナルな構図は伊波式や荻堂式などにみられる三段文様である。

中央の縦位文様（下端の一部のみ残存）は三段文様のうち中段の文様帯を左右に分ける性格のものであろう。単筒工具を施文に使用している点を考慮すると荻堂式に近い特徴を有することになる。しかし、文様構図は荻堂式と異なっている。また、器面調整や器色等他の器肌の特徴も荻堂式と違っており、むしろ、本貝塚の他の後期的な表採資料（室川上層式土器を除く）と共通している。その点を考慮すると、大山式以後の資料と見做さざる

をえない。しかし、大山式以後に三段文様は見受けられない。文様構成は大山式以前の形態である。この種の土器をまだ見たことがない。そういうわけで、本文では「型式未定」とした。今後の資料を待つことにする。

この1点を除くと、ほかは大体系式がおさえられる。2点の室川式土器は典型的なものである。カヤウチバンタ式は肥厚の形態が崩れており、大山式以後のものである。また、大山式には無文はほとんど見受けられないが、室川式期には無文も増加する。他方、新田重清氏の報告(註2)にも室川式が報告されている。以上を勘案すると、本貝塚は室川式を上限とする貝塚とみて差支えないと思う。

下限は室川上層式土器によっておさえることができる。本型式は前者に比べて量的に少ない。以上に記した土器の特徴からみて、本貝塚は縄文後期末に中心があり、晩期初頭まで存続した遺跡とみることができる。

本文を草するにあたり、胎土の混入物については前原高等学校教頭大城逸朗氏にご同定いただき、実測図および諸表の作成は本学4年次の島袋かおりさんにお世話になった。また、資料整理費として本学研究助成金の一部を使用させて頂いた。記して感謝いたす次第である。

なお、本貝塚に関しては上記以外に下記の文献(註3・4)もある。

[註]

1. 「クルク原貝塚の位置と調査経過」『うらおそい』第2号、浦添高等学校郷土史研究クラブ、1972
2. 新田重清・大城逸朗「知念村上クルク原貝塚採集の貝製品について」『沖縄県立博

物館紀要』第1号、1975

3. 「上クルク原貝塚」沖縄県文化財調査報告書第10集『沖縄県の遺跡』沖縄県教育委員会、1977

4. 「クルク原貝塚」『知念村の遺跡』知念村教育委員会、1986

(5) 八重山考古編年(私案)の一部修正

八重山地方の先史文化は1959年の早稲田編年以來、新石器無土器文化から同有土器文化へ移行することが定説になっていたが、石垣市大田原遺跡や波照間島の下田原貝塚における調査から、推移の方向は逆であることが判明した。その結果、両文化が連続するのかどうか、系譜関係が問題になってきた。両文化の系譜関係については、それを認める立場と否定する見解があり、まだ定説を見るにいたっていない。したがって、系譜の問題は今後の大きな研究課題の一つといえる。この問題について筆者自身まだ確信をもって推移の方向を示しうる段階にないが、作業仮説として

表1 八重山地方の考古編年

歴 (原) 史 時 代	川平貝塚文化	
	後期 {	パナリ焼 中森式土器
	前期 {	ビロークス式土器 新里村式土器
先 史 時 代	↑	名蔵貝塚文化(貝斧)
	?	仲間貝塚文化(石斧)
	↑	(仲間第二式土器)
	↓	?
	下田原式土器	
	下田原貝塚文化 (有土器文化)	仲間貝塚文化 (無土器文化)

は異文化の交替を念頭において、現在、模索を続けている。

(注1)

筆者は1991年、第1表のような編年試案を提示した(注1)。有土器文化と無土器文化の逆転に伴い、この編年試案(第1表)では下田原式土器文化を下位に、無土器時代の名蔵貝塚文化と仲間第一貝塚文化を上位に位置づけた。しかしながら、現在のところ、有土器文化と無土器文化の系統関係は明らかでなく、そのため両者を左右に分け、同じ枠内で有土器時代の下田原式土器文化を左下に、無土器の名蔵貝塚文化と仲間第一貝塚文化を右上に配した。下田原式土器の終末は現在のところ不明である。したがって、矢印を上に向けクェスチョン・マーク(?)をつけた。他方、無土器文化の始源も不明であり、そのため矢印を下に向け、同様にクェスチョン・マーク(?)を付した。

無土器文化には貝斧を主体とする名蔵文化と石斧を中心とする仲間第一貝塚文化があり、同表では名蔵文化を上位(新期)に、仲

第2表 八重山地方の考古編年

歴(原)史時代	外耳土器文化……原史・歴史時代文化 (川平貝塚文化)
先史時代	石器文化 (仲間第一貝塚文化)
	↑
	貝斧文化 (名蔵貝塚文化)
	↑
	下田原式土器文化……新石器有土器文化 (下田原貝塚文化)

間第一貝塚文化を下位(古期)に位置づけた。しかし、その後、年代を検討してみると、¹⁴C年代では貝斧文化が古く出ていることが分かった。したがって、表の上では貝斧文化と石斧文化を入れ替える必要が生じた。両者の関係を修正したのが第2表である(注2)。

貝斧文化が¹⁴C年代の示すように石斧文化に先行するのであれば、年代的には第2表に示したような下田原式土器文化→貝斧文化→石斧文化という方向をたどることになる。ただし、この場合、系譜関係の推移をいっているのではなく、単に年代的前後関係を示すもので、系譜関係の有無は今後の課題である。しかしながら、筆者の説明不足と図中の配置ミスが重なって、同表からはそのことが読み取れず、誤解を招いているようなので、第3表のように訂正しておきたい。

表3 八重山地方の考古編年

歴(原)史時代	川平貝塚文化 <ul style="list-style-type: none"> 後期 { パナリ焼 中森式土器 前期 { ビロークス式土器 新里村式土器
先史時代	仲間第一貝塚文化(石斧) 名蔵貝塚文化(貝斧)
	↑
	下田原式土器 (仲間第二式土器)
	下田原貝塚文化 (有土器文化)
	仲間第一貝塚文化 (無土器文化)

有土器・無土器両文化の系譜関係の有無について、現在、検討を進めていることについては前述したとおりだが、問題解決の鍵を握っているのは両者間に介在する貝斧文化とト

トゥグル浜貝塚の石斧文化の性格であろうと考えている。両文化の性格解明は目下の急務である。

まず、当面の課題は、(1) 下田原式土器文化から名蔵貝塚などの貝斧文化への移行なのか、それとも(2) 下田原式土器文化から石斧文化のトゥグル浜貝塚への移行なのか、そのことを突き止めねばならない。もし、下田原式土器文化から貝斧文化への推移であれば、①なぜ、後続の文化が土器を失ったのか、という問題と、②なぜ、下田原などの石斧を伴う文化から貝斧文化に変わったのか、という二つの問題を解決しなければならない。

他方、下田原式土器文化がトゥグル浜貝塚の石器文化を介して石斧中心の仲間第一貝塚文化に移行したとみる場合、石斧の連続性については問題がなくなるので、貝斧文化への移行のケースとは異なり、土器の喪失が中心課題となる。トゥグル浜貝塚は安里嗣淳が指摘しているように立地や伴出遺物等からみて下田原貝塚に近い様相を示している。もし、文化の推移が下田原式土器文化→トゥグル浜貝塚→仲間第一貝塚文化という方向であれば、筆者の作業仮説である異文化の交替は成立しなくなる。このことについては以前にもふれたことがあるが(註2)、下田原式土器文化と仲間第一貝塚文化は土器の有無を別とすれば、石器文化の上では連続する可能性もあり、もしそうであれば貝斧文化はこの系列から外れることになる。この場合、貝斧文化は「よそ者」ということになり、小集団が何らかの理由で八重山や宮古諸島に渡来したものの、先住民がすでにおいて定着できず、しばらくして消滅した文化ということになる。

筆者は現在、先述のように「異文化の交替」

を念頭において石斧の比較検討を進めているが、別にこの視点にこだわってわけではない。ただ「異文化の交替」という視点が、現在の筆者にとってこの問題に取組みやすいという単純な理由による。したがって、検討の結果、もし筆者の想定と異なる結論に至るのであれば、当然のことながらそれを認めることになる。

石斧の研究は形態学的研究をとおして上記のような系譜論などにも言及できるが、将来的には製作技術や機能論等も視野に入れなければならない。私自身がこの段階に到達するのは、まだまだ先のことと考えるが、上記のような多角的検討を加えることによって、その背景にある生業の問題などにも接近することが可能となり、最終的にはそのような方向を目指して進める予定である。

次に、下田原式土器文化の起源の問題であるが、まだその源流はつかめていない。そのような状況の中であって、昨年(1995)の石垣島仲筋ヒュウッタ遺跡における沈線文土器の発見は久しぶりの快拳であった(註3)。詳しくは今後の正式な報告を待たねばならないが、この土器の発見により、下田原式土器文化の性格解明が一步前進するものと期待している。

この土器の発見に関するもう一つの意義は、これまで暗礁に乗り上げていた起源の問題に希望を与えたことである。つまり、今までの八方塞がりの状態から一步抜け出て、起源解明が必ずしも単なる夢ではなく、実現可能だという望みを与えたことである。八重山には未発見の、もっと古い土器が土中に埋まっているに違いない。その可能性を示唆した意義は大きい。ヒュウッタ遺跡は臨海砂丘地の

後半部に立地しており、今後、このような砂丘地の保護が望まれる。ヒュウッタ遺跡でも性格把握に必要な発掘調査を進め、その上で史跡に指定し、保護する必要がある。

台湾で現在知られている最古の土器は縄索文土器である。この土器の上限もこれまでの約5000年前から、最近ではさらに古く約7000年前まで遡るといふ（註4）。八重山でこの種の縄索文土器が発見されないと限らない。ヒュウッタ遺跡における沈線文土器の発見は、このような希望を抱かせる。

ところで、北の宮古島では新人に属する約25,000年前のピンザアブ人が知られている。また、南の台湾では新人段階の佐鎮人が有名であるが、近年、台湾海峡にある澎湖水道の海底から成人男性の大腿骨下端部が発見されている（註5）。八重山周辺におけるこのような出土状況から、八重山地方でも化石人類発見の可能性は大いにあり、今後、この面にも注意を向ける必要がある。

〔注〕

1. 八重山の考古編年に関しては複数の研究者によって、それぞれ異なる編年試案が提出されている。それらと区別するため標題では特に括弧に入れて（私案）としたが、稿中では文脈から他との混同のおそれがないため、本文の趣旨にしたがって「試案」を使用することにした。

〔註〕

1. a 高宮廣衛「八重山の考古学」『沖繩・八重山文化研究会』第5号、1991、10、27
沖繩・八重山文化研究会
b 高宮廣衛「八重山考古学研究略史」『陳

奇禄院士七秩榮慶論文集』陳奇禄院士七秩榮慶論文集編輯委員会、台北、民国81年（1992）

2. 高宮廣衛「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』第14号
沖繩考古学会、1994
3. a 「石垣島最古の土器発掘」『八重山日報』1995、12、11
b 「先島最古の土器発見」『沖繩タイムス』1995、12、12
4. 宋文薰「台湾の先史時代」『復帰20周年記念 沖繩研究国際シンポジウム』『復帰20周年記念 沖繩研究国際シンポジウム』実行委員会、1992の講演発表による。
5. 馬場悠男・宋文薰ほか「台湾海峡澎湖水道海底より採取したヒト大腿骨について」『日本人類学会研究発表要旨』1994年

（6）開元通宝の福岡における出土例

—特に7～12世紀ごろの遺跡を中心に—

1. はじめに

沖繩の先史終末期（7～12世紀ごろ）出土の開元通宝について、筆者は従来の宝器的・財宝的・呪術的あるいは装飾的解釈から離れ、貨幣の認識の下に受容されたのではなかろうか、そういう観点から現在、関連資料の収集を行っている。上記の予察については、すでに数篇の拙文（註1、2、3）に記しているため、ここでは省略するが、開元通宝が貨幣として受容されたか否か、現在のところ確認する術がない。文献に明記されておれば問題はないが、何しろ、当時はわが国自体、文献が少なく、ましてや南島に関する記事など稀少で、帰化したことや献物を奉じたこと

などが僅かに「続日本紀」などにみえる程度である。開元通宝が沖縄でも貨幣として使用されたか否か、現状では文献からのアプローチは不可能に近い。したがって、この問題に迫るには民俗例や後世の歴史資料等を援用しながら、考古学的にアプローチする以外にない。そのためには、まず本県内における出土状況等の的確な把握から始めなければならないが、それと同時に周辺地域における出土状況等も視野に入れる必要がある。開元通宝は発行国の中国を越えて周辺諸国にも及んでおり、沖縄出土の開元通宝も、このような動きの中で捉える必要があるだろう。

開元通宝は近年、台湾でも2遺跡で出土が知られている(註4・5)。台湾の例については次回に取上げることにし、今回は福岡における出土例を紹介する。福岡の出土例については、福岡市埋蔵文化財センターの吉留秀敏氏の全面的な協力を得た。ここに記して感謝申し上げる次第である。

なお、吉留氏からは報告・未報告合わせて5遺跡の出土例をご紹介いただいているが、ここでは既報告の資料についてのみ紹介する。

2. 福岡における出土例

1 海の中道遺跡

開元通宝が1枚出土している。以下、報告書より抄録する(註6)。

本遺跡は福岡市東区に所在する。1979年から81年まで、3次にわたる発掘調査が行われた。遺跡は「海の中道」と呼ばれる砂嘴の、玄界灘側の砂丘に形成されている。

第3次調査の際、包含層から皇朝銭5枚と

ともに開元通宝が1枚発見された。皇朝銭の5枚は万年通宝(天平宝字4年、760年)1枚、貞観永宝(貞観12年、870年)1枚、延喜通宝(延喜7年、907年)3枚である。

第3次調査は第1・2次調査より約200m離れた国営公園団地の東端近くで行われた。本地域の年代は皇朝銭のうち延喜通宝とそれに伴出した新羅焼の瓶によって、10世紀代に比定できるという。

2 柏原遺跡群ⅡのG支群

本遺跡では2枚出土している(註7)。

G支群は樋井川第3支流によって開析された小さな谷に向かって築造された一基の古墳よりなる。古墳の保存状態は良好で、羨道の天井石一枚が抜き取られて開口していただけだが、石室内は盗掘にあい、遺物は攪乱されていたという。

本墳より装身具・武具・農耕具・容器・その他の遺物が出土した。それらに伴って開元通宝が2枚、羨道後半部の土器群の下、敷石間の丹混入の粘土より出土した。開元銭の1枚は保存状態が悪いという。

本遺跡で調査された24基の古墳は、その築造年代が6世紀中頃から7世紀前中頃と推定されている。その中で、開元通宝が出土したG支群の古墳は、本遺跡群における4段階の築造年代のうち第Ⅱ段階の早い時期に比定されている。

また、本遺跡の開元通宝について、発掘担当者の山崎純男氏はきわめて短時間のうちに本墳にもたらされたものとみており、かつ海外流通との関係で重視している。

3 朝倉橘廣庭宮遺址

本宮趾は朝倉群宮野村字須川にある。字須川は長安寺原、鐘突、馬乗、寺ノ前の4小字からなる。以下、報告書より抜粋する(註8)。

須川一帯の台地は先史遺物が散乱し、特に弥生式土器や祝部式土器が多かったという。昭和8年12月23日、字鐘突の台地南部で道路工事の際、縄文土器が発見された。

上記縄文土器遺跡より西方約1町ばかりの箇所において、昭和9年1月3日、道路工事中に古銭入りの壺が1個発見された。土器は蓋、壺および皿からなり、いずれも丹紅色の鮮やかな素焼であったという。地表下約二尺のところの下に皿をおいて、その上に壺をおき、その中から開元通宝が発見された。壺は土で埋まり、開元銭は壺の底から2枚出土した。2枚とも破損品である。開元銭は形量字形等より初鑄のものと認めてよいという。埋銭の理由について、骨壺としての副葬品か、それとも宮居と何らかの関係を示すものか、今後の課題としている。

資料をご提供下さった吉留秀敏氏から、朝倉出土の上記土器は報告書掲載の略図からみて古代(7~8世紀)のものとみられる、というご所見をいただいている(註9)。

3. おわりに

以上、福岡における開元通宝の出土例を紹介した。現在のところ、古代の後半に比定できる遺跡の発掘調査事例は九州でも少ないということであり、今後、調査が進めば、この時期における古銭(開元通宝を含む)の出土例は増加するものと思う。

ところで、話は変わるが、弥生時代の五銖銭についても貨幣としての認識はなかったか

どうか。沖縄では久米島の大原貝塚など5遺跡で出土が知られている。開元通宝ほど多くはない。このような時点で、「貨幣としての認識云々」を持ち出すと、唐突で性急の謗りをまぬがれないが、韓国ではすでに交易活動の中で古銭を捉える研究が始まっている。

李賢恵氏は「韓半島各地から発見される五銖銭・王莽代の貨泉のような中国貨幣は、中国商人乃至は郡県出身の商人たちに依る商取引の痕跡と見ることが出来る」とし、また海に面した通交便利な地域から出土しているとも述べている(註10)。

韓国と沖縄とでは中国との地理的距離も異なり、また社会の発展状態も異なっていたであろうから、交易の形態も当然同じレベルで論ずるわけにはいかないと思う。したがって、韓国のように五銖銭を貨幣として使用したとまでは言いきれないが、貨幣であるとの情報は伝わっていて、そのような認識を当時の沖縄の人々ももっていたかもしれない、と推測している。

上記のような朝鮮半島における貨幣を用いた国際的貿易活動の状況は、おそらく一衣帯水の距離にあるわが国にも九州経由で伝わっていたであろう。わが国においても一部ではすでに五銖銭を媒体とした国際交易が行われていなかったかどうか。現在のところ、弥生遺跡からの五銖銭の出土例は少ないようだが(しかし、古墳時代には若干増加しており、このことを筆者は次代への撃ぎとみて注目しているが)、当時の九州地方における貨幣経済の解明が進めば、沖縄出土の五銖銭の性格も考えやすくなるのではなからうか。上村俊雄氏によると、沖縄の貝塚から出土する五銖銭は九州経由のものと、中国から直接もたら

された二つのルートが考えられるという（註11）。東アジア各地域間における国際交易の状況は、今後、徐々に明らかになるものと思う。今後の資料に期待したい。

〔註〕

1. 高宮廣衛「開元通宝からみた先史終末期の沖縄」大川清博士古稀記念論文集『王朝の考古学』雄山閣、1995
2. 高宮廣衛「城時代研究の今昔」『近藤義郎古稀記念 考古文集』考古文集編集委員会 1995
3. 高宮廣衛「唐・大和時代の沖縄—開元通宝の示唆するもの」『月刊 文化財発掘出土情報』6月号、ジャパン通信社、1995
4. TSANG Cheng-hwa "Archaeology of the P'eng-hu Islands", Institute of History and Philology Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 1992
5. 臧 振華『臺北縣八里鄉十三遺址文物陳列館規劃報告』中央研究院歷史語言研究所執行、中華民國84年（1995）
6. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集『福岡市 海の中道遺跡』福岡市教育委員会 1982
7. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集『福岡市 柏原遺跡群Ⅱ』福岡市教育委員会、1986
8. 玉泉大梁・鏡山猛「朝倉橘廣庭宮遺址」『史蹟名勝天然記念物調査報告書（史蹟の部）』第9輯、福岡県、昭和9年
9. 吉留秀敏氏の教示（1995、11、24の私信）による。
10. 李賢恵「1～3世紀の韓半島の対外交易」

『アジア史学会ニュース』第13号、1995

11. 上村俊雄「沖縄諸島出土の五銖銭」『鹿大史学』第40号、1992

追 記

第1図1に示した土器の文様構成について大山式以後に類例なしと記したが、校了直前になって類似の文様をもつ土器が宮城島高嶺遺跡の第2号竪穴住居跡で1例出土していることを知った（沖縄県文化財調査報告書 第92集『宮城島遺跡分布調査報告書』沖縄県教育委員会、1980）。今後、この種三段文様の再出する背景について考えてみたいと思う。